

令和2年度 第1回徳島県総合教育会議 議事録

日時：令和2年7月9日（木）14:15～16:15

場所：徳島グランヴィリオホテル

1階グランヴィリオホール

1 開会

（司会進行）

＜佐々木副部長＞

本日はお忙しいところお集まりいただきまして、ありがとうございます。

ただ今から、令和2年度 第1回「徳島県総合教育会議」を開催いたします。

本来でありますと、本日ご出席いただいております方々をご紹介させて頂くところでございますが、時間の都合によりまして、別添の名簿と配席図でのご紹介とさせていただきます。

なお、本日は、「徳島県総合教育会議運営要綱」第4条に基づきまして、「関係者」及び「学識経験者」の皆様よりご意見を頂くため、「歴代の総合教育会議構成員」の皆様、「教育団体」、「経済団体」の皆様にもご出席いただいております。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、まずはじめに、飯泉知事よりご挨拶を申し上げます。

（あいさつ）

＜飯泉知事＞

本日は、第1回となります「徳島県総合教育会議」を開催いたしましたところ、皆様方には大変お忙しい中、また足元の悪い中、ご出席を賜り、誠にありがとうございます。

また、日頃から皆様方には、本県教育振興のために大変ご尽力を頂いているところであり、日頃のご尽力に対し、心から敬意と感謝を申し上げたいと存じます。本当にどうもありがとうございます。

さて、皆様方にもマスク、そして非常に広い距離、ソーシャルディスタンスをとらせていただいているところでありますが、今、世界中で新型コロナウイルス感染症パンデミックということで、日本におきましては、「日本の奇跡」、このように世界からも評されているところであり、重症者が少ない、感染者数が少ない、こうしたことで、とりあえず、まず第一波を押さえ込むことができたところであります。

しかしながら、このままでは、社会経済活動が非常に厳しい状況に日本は追い込まれているところでありまして、国を挙げて、感染拡大防止と段階的に社会経済活動を上げていくために、「新しい生活様式・スマートライフ」を身につけながらこれを行っていく、大変厳しい局面を迎えているところであります。

また、国におきましては、東京をはじめとする首都圏、あるいは大阪をはじめとする近畿圏など、感染拡大が見られる中、ステップ3に明日から移っていくこととなります。どう変わってくるのか。全国大会、屋内外を問わず、5千人大会までは許容をしていこうということでもありますので、これからは、全国的には、感染経路がわからない、あるいは感染者数の増加、こうしたものを第2波、第3波という形で我々は迎え撃たなければならない。そして、社会経済活動を確かに上げていく必要があるわけでありまして、こうした中、今回の新型コロナウイルス感染症第1波の中で、国の方から学校の臨時休業を求められることとなり、長期間にわたり、学校が休業となったところでもあります。しかも、年度をまたぐということがありましたので、学校の始業式、終業式、あるいは卒業式、入学式、こうしたものに多大な影響も出たところでもあります。

既に東京の有名私学ではオンラインですべて授業を行ってきている。しかし、それがとれない学校にとってみて、来年迎える高校3年生の大学入試、本当に同じ条件で行うことができるのだろうか、高校3年生の皆様方がネット上で、「何とか9月入学を導入することができないだろうか」と、こうした意見まで出される、まさに一大教育改革に対して我々はどうのように取り組んでいくのか、こちらについても大きな局面を迎えることとなりました。

特にこの「遠隔教育」、実は新型コロナウイルス感染症が発現をする前に、昨年11月、文部科学省の方から、日本が世界の中では特にまず義務教育、世界OECD、いわゆる先進国においては、一人一台端末が当たり前のところ、今なお3人に一台の端末、これではなかなか難しい、こうしたお話があり、これを国に要求したところ、財務省から厳しい査定を受け、いわば「ゼロ回答」が出てしまったと。「何とかならないだろうか」と全国知事会の方にお申出をいただきまして、ちょうど11月、当時はまだ東京に自由に行くことができましたので、総理官邸で行われた政府主催全国知事会議におきまして、知事会を代表し総理に「やはり日本が世界最先端の遠隔教育をはじめとする新たなICT教育、これを行うための文科省が掲げてきた『GIGAスクール構想』を何としても具現化を図っていただきたい」と会長として申し上げたところ、総理からその回答として、「ぜひやろう」と、予算化していただいたところでもあります。そして、これは補正でありましたので、1月から新型コロナウイルス感染症が出たことにより、さらにこれに追加の補正がなされ、あわせて4千6百億円が予算化されたことにより、「遠隔教育」、そして「一人一台端末」、義務教育で行う「GIGAスクール構想」がいま着々と進むこととなっております。

しかし、そうした中で、どのような形でこの遠隔教育を行っていくのか、また、昨日も地方三団体、市長会、町村会共々、岸田政調会長をはじめ、関係各省にも申入れを行わさせていただいたところではありますが、「新しい生活様式」「ソーシャルディスタンス」を導入をいたしますと、今、小・中学校におきましては、平均64平米、皆様方がぱっと計算をされると、じゃあこの中で生徒の数、何人なら可能な

のか、単純計算をすると、20名という答えが出ます。しかし、今、国の方針では40人以下学級となっているところでもあります。このままでは教室の「密」状況を解消するのは難しい。やはり「新しい生活様式」に則り、またICT教育、「GIGAスクール構想」をより具現化、そして効果を上げていくためには、学級編制を一大改革をしなければならない。こうした点も強く申入れをさせていただいたところでもあります。

また、徳島におきましては、高等学校におきましても、あるいは特別支援学校におきましても、これは全国知事会から提言をし、まずは1兆円、追加で2兆円、合わせて3兆円の地方創生臨時交付金、これを活用いたしまして、まずは10億円を投入し、「1人1台端末」、タブレット型端末を貸与をさせていただき、これをスタートをさせようと考えているところでありまして、そうした意味では、これらの活用、さらには、今後のICT教育、こうしたものについての課題、また、今後の高校生、これは広く教育委員の皆様だけではなく、歴代教育委員の皆様方、また教育団体の皆様方、さらには、経済界の代表の皆様方から御提言を頂く必要があるであろうということで、総合教育会議を開催をして初となる拡大の総合教育会議を今日ここに開催をさせていただいたところでもあります。

そこで、まず前半につきましては、教育団体の皆様方、また経済界の皆様方、さらには、歴代教育委員の皆様方からご提言を賜り、そしてこれをお受けをするかたちで、後半は現教育委員の皆様方に更に議論を深めていただこうと、こうした二部形式で進めさせていただきますので、どうぞ忌憚のない御意見、御提言を賜りますようよろしくお願いを申し上げます。まずは開会のご挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願いをいたします。

<佐々木副部長>

ありがとうございました。それでは早速ですが議事に移ります。

これからの議事進行につきましては、飯泉知事をお願いしたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

2 議事

(進行)

<飯泉知事>

それでは、早速議事に移らせていただきます。

本日は、「新型コロナウイルス感染症の影響を踏まえた『学びの保障』」をテーマとして、まず事務局の方から「コロナ禍の影響及び本県の対応状況」について説明をさせていただいたのちに、「関係者・学識経験者」としてお越しいただいている皆様方からご意見を賜り、その後、「教育委員」の皆様方と意見交換をして参りたいと考えております。

それでは、まず事務局から説明をお願いします。

(1) コロナ禍の影響及び本県の対応状況

(事務局より「資料1」により概要説明)

(2) 関係者・学識経験者からの意見聴取

<飯泉知事>

それでは、早速、議事(2)「関係者・学識経験者からの意見聴取」に移りたいと存じます。

それではまず、徳島県高等学校長協会の青山会長さんから時計回りで順に、そして徳島県経営者協会の林会長さんまでお願いしたいと存じます。

それでは青山会長さん、お願いいたします。

<徳島県高等学校長協会 青山会長>

徳島県高等学校長協会会長の城東高校校長の青山でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

私の方からは、高校の臨時休業中の状況について報告をさせていただきます。

臨時休業となりまして、県教委の方からは、Web会議システム(Zoom)を紹介していただきました。普通40分の時間制限があるのですが、それを授業に活用できるようにということで、時間制限なしのシステムを提供していただきました。そして、「まなびポケット」といって、教材配信用のシステムも提供していただきました。それらを活用して、教員は慣れないオンライン教育に挑戦をいたしました。

教員からは「教材を準備するのに非常に時間がかかった」というような感想がりましたが、一方、生徒からは、「モチベーションが下がりがちな一人の学習に比べて、非常にモチベーションが上がった」とか、「わからないところが質問できて非常に役に立った」とか、好評を得ております。

ただ、課題がありまして、本校877名の生徒がいるのですが、「家庭で無制限にインターネットにつなげる環境、Wi-Fi等が整っていますか」という質問に対しましては、52名の生徒が「整っていない」と答えました。この52名の生徒に学習の機会を保障するということが大きな課題となっております。

その課題を解決できるのが、今回の高校生全員にタブレットを1台配付するという事業です。このタブレットがありますと、環境の整っていない52名の生徒を登校させて、教室に分散という形で密にならないようにしまして、学校の教育情報ネットワークを使えば、全員にオンライン教育の機会を保障することができます。

また、兄弟がおりますので、兄弟が1台の家庭用パソコンを共有して「譲り合う」というケースがあったのですが、そういうご家庭にもタブレットを貸し出しすることによりまして、兄弟の学習機会を保障することもできるようになります。

そういう意味では、このたびのタブレットというのは、非常にありがたい画期的なことであったと思っております。本当にありがとうございました。

また、本校とつるぎ高校、ひのみね支援学校は、オンライン教育の実証モデル校に指定されておりました、他校に先駆けて、生徒3人あたり1台のタブレットを配置していただけるようになっております。それを活用しまして、他校から参考にいただけるような取組をしてみたいと考えております。

以上、報告となります。よろしくお願いいたします。

<飯泉知事>

どうもありがとうございました。それでは、湯藤会長さん、お願いいたします。

<徳島県中学校長会 湯藤会長>

徳島県中学校長会会長の阿波中学校校長の湯藤と申します。

中学校現場をすべてまとめたわけではないですが、阿波市の状況等を説明させていただきたいと思っております。

休業中は、子どもたちがいかに家庭学習をさせるかということで、やはり中心は紙ベースの教材等の配付で対応せざるを得ない状況でございます。ただ、本市の場合、子どもたちが入学式とか始業式に参加しただけですので、学校のことを詳しく説明とはいかないんですけれども、ケーブルテレビを使いまして、各校が5分から10分程度の番組なんですけれども、「何年何組の担任です。部活動はこういうことを担当します。」というようなことを発信しました。本市は14校あるんですけれども、それぞれ発信しました。保護者等への連絡は主にホームページ、またはメール配信という形になります。

遠隔授業の調査を市教育委員会の方でしたんですけれども、本市の場合は、精度が高いとは言い切れないということなんですけれども、家庭でその環境があるのが約83パーセント程度という数字を聞いております。ただ、まだまだ遠隔授業というのは難しいかなというのが現状です。ネット環境がまだまだというのが正直なところですが、メール等を使って総合教育センターが作っている動画チャンネルであるとか、文部科学省が紹介している教科書会社のホームページもメールを使って保護者には周知いたしました。

現在、悩んでいることを聞いていただけたらと思うんですけれども、学習の保障につきましては、夏休みの短縮等を実施することによって、ほぼほぼ8月の終わりには、時間数では取り戻しができそうな感じで進んでおります。今後、第2波、第3波が来たときに、その辺はちょっと不安な状況はあるんですけれども、順調に今のところ授業が進んでいる状況です。各校長が集まっておりますと話をすると、一番困っているのは、「修学旅行をどうする」とか、「文化祭をどうする」というふうな具体的な話がやっぱり多くなりまして、なかなかこういう遠隔授業等についての話をする機会はあまりありません。

それから、やっぱり3年生にどう充実感を味あわせてあげるかということで、県総体、体育大会とかも中止になりましたので、高校の方は代替の大会を県規模で行っているんですが、中学校はございません。それぞれの地域で3年生の集大成の場を確保するように、現在、取組を進めているところです。以上です。

<飯泉知事>

どうもありがとうございました。それでは、伊丹副会長さん、お願いいたします。

<徳島県小学校長会 伊丹副会長>

徳島県小学校長会副会長の池田小学校、伊丹賢治でございます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

それでは、「学びの保障」に関しまして、小学校の立場から現状と課題を申し上げたいと思っています。

まず、授業時間の確保の取組についてでございます。

授業時間の確保につきましては、湯藤会長さんからも少しお話がありましたように、夏期休業期間の短縮等、各校の実情に合わせた授業時間の確保の対策が立てられております。第2波もなければ、おそらく二学期中には総授業時間確保とともに、内容の充実も徐々に図られるものと考えております。

ただ、課題の一つとして、子どもの「心のケア」を図りつつ、学習を進めることがあります。これまで当たり前であった話し合い活動、交流学习などが難しく、子どもたちにとって大きなストレスになることがあります。本校でも、教職員は拙速に授業を進めるのではなく、子どもにしっかり向き合い、教師自身も心に余裕と笑顔を持って、潤いある授業実践に臨むように伝えていきます。

もう一つの課題は、夏期休業期間の短縮に伴う熱中症対策です。現在、各教室にはクーラーが整備されて、暑い時期でも学習が可能となっております。ただ、経験のない猛暑の中での登下校は、各校ともその対策を模索中です。いろんな校長に聞いても「どうしようか」と。登下校中、密を避けることを条件にマスクを外す。また、下校前には十分な水分補充をさせるなどの対策を考えております。

続きまして、学びの質を確保する取組について少し申し上げます。

ご存じのとおり、小学校では、今年度より新学習指導要領の全面実施が行われています。各校において、学校の「新しい生活様式」を踏まえつつ、要領の趣旨に則った主体的、対話的で深い学びにつながる学習活動ができないものか工夫を重ねている状況です。そこで、本校において、向かい合っただのグループ学習等が難しい現状の中、「自分の思いや考えを書く」、この場面を増やそうとしています。その取組の一例が「リフレクション60」でございます。各学習時間の振り返りをまとめるときに「R60」として、限られた字数「60文字以内」と、二つの条件、「2文で書く」、「接続詞を使う」、これを基に学習の振り返りを「書く」取組を行っています。主に中・高学年の学習のまとめに活用し、書く力の向上や表現力の育成につなげて

おります。

また、「書く」ことによって自分の意見や考えをまとめるために、紙を挟めるタイプのこのようなホワイトボードを活用しています。ときにはボードを見せ合って対話的な学びにつなげるなど、有効な学習ツールとして、現在、効果的に活用しており、教職員にもとても評判がいいです。ちなみにこれは教職員が休業中に全校生徒の339名分を自作したものです。

様々な制限がある状況下ではありますが、児童の学習意欲や学びの質を高めるために、日々試行錯誤しながら実践に取り組んでいる状況でございます。

以上、「学びの保障」に関しまして、2点申し上げました。ご指導のほどよろしくお願いたします。

<飯泉知事>

どうもありがとうございました。それでは、大石会長さん、お願いたします。

<徳島県国公立幼稚園・こども園長会 大石会長>

徳島県国公立幼稚園・こども園長会より、八万幼稚園の大石と申します。よろしくお願いたします。

新型コロナウイルス感染防止対策として、学校関係は3月より休校でしたが、就学前教育におきましては、幼稚園、こども園、保育所、保育園など様々な施設があり、それぞれ対応は様々でした。幼稚園に関しては3月の休園は少なかったですが、4月になると増えてきたように思います。

しかし、預かり保育を実施する園は多く、仕事に従事する家庭は子供さんを一人で置いていけないので、預かり保育を利用しておりました。郡市、市町によって、本当に様々な対応なんですけれども、徳島市に関してですが、入園式の翌日から休園となり、5月25日に再開しました。

休園中は、やはり幼稚園とつながっているという感覚を持ってほしくて、ホームページや一斉メールでコロナ関係の情報とか、家庭でできる遊びや活動、それから、コロナ対策、手洗い、うがい等の発信をしてきました。それとともに、家庭での様子を知るために、電話で定期的に連絡をとりました。やはり、家庭に閉じ込められてしまうため、虐待であるとか、育児放棄の傾向がないか等々、ご家庭を含めた子どもさんの健康状態にも気を配りました。

再開後は、登園時、昼食前、預かり保育前の検温、それから1日4回の定時の消毒、子どもたちが帰った後の保育士室の消毒など、毎日しております。マスクを装着していますが、戸外遊びは、やはりこの暑さのため外していますが、これから暑さで熱中症が心配です。

ソーシャルディスタンスは園児の生活では大変厳しいです。お弁当の時とか、手洗いで並ぶ時、話を聞く時などは、向かい合わせや近くにならないように、適切な距離を分かりやすくするため床にカラーテープを貼って、席とか立ち位置を意識で

きるようにしたり、椅子とか机の配置を考えたり、ソーシャルディスタンスの工夫しております。

幼稚園でも行事の変更や中止が多くありました。幼児に経験してほしい活動や行事は、内容を縮小したり、変更したり、時期を先に延ばしたりして対応しています。

今は、運動会の概要、参観日の持ち方、遠足などを検討しています。教育課程においては、幼稚園は学校のように「何かの単元を何時間」というふうなことはございませんが、やはり、それぞれの時期に応じたねらいをもって教育にあたっています。年限や時期、季節に応じて、園の特色を生かした活動内容でコロナ禍においても柔軟に取り組んでいます。

行事はやはり園児の生活に彩りを与えてくれます。この感染予防の状況がいつまで続くかわからない今、行事の見直し、在り方もどんどん変化していますが、何より心配なのは「園児の経験が奪われていないだろうか」ということです。それと、参観日が中止となって、保護者の方に、子どもたちの育ちを見ていただく機会がほとんどなく、幼児教育を理解して、支援していただけたのかという心配もございます。

この幼児教育というものは、本当に目に見えにくく、また数値で計りにくいのです。そのため、この「学びの保障」ということにおいて、相当、幼稚園やこども園の中で検討し実施していかなければならないということを、職員同士で話し合っています。以上です。

<飯泉知事>

どうもありがとうございました。それでは、美馬理事さん、お願いいたします。

<鳴門教育大学 美馬理事>

本日お集まりの皆様、昨年度まで本当にお世話になりました。心より感謝を申し上げます。この4月より鳴門教育大学の方に勤めております。

本日は本学での今までの取組と、今後、本県の学校にどのような支援ができるかというようなことについて、少しだけお話しをさせていただきます。

まず、本学でも今年は入学式ができませんで、4月からオンライン授業ということになりました。本格的に始まったのはゴールデンウィーク明けでございました。

「(オンライン授業を)すべての教員ができること」という言葉を目標に教員対象の研修を行いました。(オンライン授業は、)大きく分けると、双方向での授業、オンデマンド型の授業、それから一方通行の課題を与える授業ということでありましたけれども、教員の皆さんがそれぞれ工夫をして、その成果が今出てきているので、一度この辺ですべての先生方の今までの工夫といったものを取りまとめて、分析してみんなで共有をしようということをしているところがございます。

それから、本県の学校にどのような支援ができるか、ということについてですが、本学は教育大学ということで、「今こそ地域の学校へ貢献すべきときだ」と考えてお

ります。文科省も言っておりますように、今までの「言語スキル」と「数量スキル」に加えて「情報スキル」というのがこれからは一番必要になってくるという観点に立ちまして、今後は、Pisaの学力調査のみならず、学力・学習状況調査も全部C B Tで行われるということです。まずは子どもたちがタブレット等を通してコンピューターの操作がしっかりとできること、「I C Tを使ったことに慣れていく必要性」というのがまず大きいだろうと考えます。そういった意味で、先ほど知事からお話がありましたように、「1人1台端末」が早急にできるという環境、これによってハード面は素早く対応できたと。これは県議会と知事さんのおかげであるというふうに考えております。

で、その先にあるものというのは、今度は教員の授業づくり力、I C Tを使った授業、そしてまた遠隔授業、そういったことに対しての我々の支援というものがこれからは必要になってくるだろうと。それとともに、子どもたちの学び方についての支援というのも必要になるだろうと。

今後は、アナログ型の対面授業と、I C Tを使った授業、それから遠隔授業という形態を「ハイブリッドで組み合わせていく授業」が求められていくと思います。遠隔授業も含めたI C Tを使った新しい授業、I C Tを使ったアクティブラーニング、遠隔授業におけるアクティブラーニング、そういったものの開発と教員研修をこれから取り入れ進めていこうということで、現在、来年度に向けて、例えば「オンライン教育支援センター」、仮称ですけれども、こういったものを創って、情報基盤をしっかりと管理して、徳島県を中心に、教員の授業スキルを伸ばしていくための授業開発と研修を行っていくこと、また、エビデンスの点ですけれども、ビッグデータの解析等を支援する、そういったことができる場所を創っていければ、というようなことを、今、丁度話し合っているところでございます。

まずは、せっかく全部そろったI C T機器をどう活用するかというところで、これは大学がこれからしっかりとその役割を担っていかなければならないのかなと思っております。今後とも、大学が担うべきところをお教えいただきながら、県と一緒にやっていきたいなというふうに思っています。以上でございます。よろしくお願いいたします。

<飯泉知事>

どうもありがとうございました。それでは、松重学長さん、お願いいたします。

<四国大学 松重学長>

四国大学の松重です。私が今日この会に出席しているのは、以前県の教育委員を担当という立場からだと思えます。で、私の方から3点についてお話をさせていただければと思えます。

まず第一点は、当時、我々が教育委員のとき、初めての「教育大綱」作成に参画させていただきました。基本方針として、「未知の世界に果敢に挑戦する、夢と志あ

ふれる『人財』の育成」とあるんですけど、この「未知」という言葉は改めて重要な意味がある言葉と思っています。最近のコロナ禍の世の中では、「未確定」というところが今、現実としてあります。生徒・学生の皆さんが卒業後にそうした社会に出る状況にあり、まさに非常に不安定な社会でも、きちんと生活できて、生きていけるような生徒さん、学生をつくるというのが大きなことかなと思います。そういうふうに、基本的に自立できて、いろんな観点で活躍できる人をこれから育てる、こうした観点も現時点では、特に必要かなと思います。

2点目は、「ウィズ、ポストコロナ時代」での教育。まさに徳島県は、そういった「遠隔講義」についても、知事をはじめ非常に先進的な県です。現在、我々の大学でも実施していますけれど、「遠隔授業」に対しては、優れた面と課題もあります。それとともにもう一つは、「対面授業の重要性」というのが改めて認識されました。ですので、「遠隔」のいいところは更に伸ばし、「対面の重要性」も改めて教育の中で重視してやっていく、こうした両面での視点が必要かなと思います。

この「遠隔」の場合、やはり課題の一つはハード面があります。ICT機器としてタブレットとかPCもあるんですけども、通信のネットワークの整備も重要だと思います。「Wi-Fi 6」、それから5G、ビヨンド(Beyond) 5Gなど、これらは今からの技術で、5年後、10年後を見込んだ設備投資も不可欠になってきます。徳島県は是非、こういった分野の先進県、モデル県となって、トライアンドエラーもあると思うんですけど、是非全国に発信をしていただきたいと思います。

別の言い方をしますと、今後は教育も含めて空間的にフラットになると。したがって、別に「徳島だから、どこだから」ではなくて、本当にいいところは全国が、世界が注目します。そういった面では、特徴ある教育や人材育成、こういったものを実際に行っていくことが、これからの教育としては非常に重要かなと思います。

3番目は、今、私は大学に勤務しているのですが、遠隔講義を実施していると課題もあります。それは、学生さんのICT環境が必ずしも十分でない。恐らく、あと1、2年すると、GIGAスクールの関係で徳島県出身の高校生は全員タブレットなどの端末に対応できますが、教員側での教育方法・内容ソフト面での充実も必要だと思います。

ところで、四国大学は私立大学なんですけど、約72パーセントが県内出身の高校生であり、7割、8割は地域の企業に就職します。だから地域と深い関係がある公立大学的な位置づけにもあると考えていただければ、もっと地域の私立大学に機器・施設整備などの面でもご支援を頂くというのが、地方創生については重要かなと思います。ちょっと我田引水のところがありますけど、教育をとおして地域の活性化、人材育成といったところは、別に国立であろうと、公立であろうと、私立であろうと同じだと思います。

それから、就職についても、実はこの数か月で地域志向が強まっているというのが全国的な傾向としてあります。UターンやIターン、Jターンなど。逆に言いますと、我々の大学の学生さんは、こうしたターン学生も加わると、就職はかなり競

争が激しくなってきたかなと思います。で、重要なのは、皆さんが地域に戻ってと言うんですけど、結局は、就職先となる地域の企業などが元気でないと。就職の面でも、地域の企業も含めて、地域の大学と一緒にこれを盛り上げていくことに対しての施策が必要かなと思います。我々もインターンシップも含め実際できるだけ地域教育を充実・実施しています。是非こういう施策についても、県としても、教育、それから人材育成という面で大きな観点で尽力していただければと思います。以上3点、お話をさせていただきました。

<飯泉知事>

どうもありがとうございました。それでは、坂口弁護士さん、お願いいたします。

<坂口弁護士>

元教育委員の坂口でございます。3分と決められてますので、なかなか個別具体的なアイデア等の話までいけないと思いますので、幅広の話になってしまいますけれども。

まず最初に、「コロナがじゃあ何を変えたか」といったところから、この問題というのは考えなければいけないと思ってます。私自身は「コロナがじゃあ何を変えたか」、結論的には、実は「何も変えていない」というのが私の持論です。何か価値観を変えたかという、世界がいろいろ慌てふためいているように映るところもあるんですけども、何か価値観が変わった、社会が変わった、コロナがそれをもたらしたということはないと。今までの人類の歴史の中にあつた感染症の一つに過ぎないというふうに思っています。

じゃあ、この「コロナの騒動は何なのか」といったら、これは特に日本においては、既に時代にそぐわなくなった不都合ないろんな事実であるとか、今までごまかして問題をいろいろ先送りしてきたいろんな歴史があると思うんですけども、そういうものがあぶり出されているに過ぎないというふうに思っています。

つまり、コロナ前に課題だったことが、そのままあぶり出されて、更に、ある意味、課題が明確になったというだけの話であって、これは、我々が今直面している状況とはどういう状況かという、例えば、バブル崩壊であつたり、あるいは同時多発テロ、リーマンショック、東日本大震災、原発事故、いろんな変わるきっかけいろいろあつたと思うんですけども、その都度、根本的な価値観の創造、クリエイトする創造というところに踏み込まずに、既存の価値観、既存の生活基盤というものを当たり前のベースとしてごまかし、つまり、平成の20年、30年の失敗の歴史を、これからまた日本が繰り返してしまうのか、あるいは、ここでちゃんとコロナを契機に、問題、課題に直面して、しっかりそれを根本的に変えていく気があるのかどうかということを試されている、そういう局面にあるんじゃないかというふうに理解しています。

そういう意味で、今日の会議の資料とか、それ以外にもいろいろ調べてきました

けれども、なかなかやっぱり教育という場で、オンライン、タブレットは非常に重要だと思いますし、これからの何かを変えていく基盤としては非常に重要なものだと思います。ただ、それは所詮、手法でありシステムの問題であって、我々が変えなければいけないのは、生活基盤、価値観を根本から変えなきゃいけない、「何のために人間は生きているのか」ぐらいのことを根本から変えるぐらいの教育の変革が必要だというふうに思っています。

つまり、今までやってきたことを、それを当たり前やってきたことをベースにして、「それに代わることをどういうふうにやるのかな」とか、「元に戻るためにはどうしたらいい」だとか、そういったことを考える場ではないんじゃないかというふうに私は思います。要は、「今まで当たり前やってきたことって本当に当たり前なのか」とか、「今まで当たり前のように意思決定してきたシステムって本当に合理的なシステムなのか」とか、「それってデータやエビデンスに基づくことなんだろうか」とか、そういったことを見つめ直すチャンスなんじゃないのかなというふうに思っています。

そういったところから、これまでのベース、常識にとらわれない形でやらなきゃいけないと。で、最初の「教育大綱」を策定するときにも散々言ってきたことですが、今一度大事なことなので、この「総合教育会議」というのは何のためにやるかと言ったら、「未来を担う子どもたち」のためにやるわけであって、絶対それが大人の都合であったり、組織の論理であったり、あるいは予算も然り、これも予算の縛り、お金がないならつくればいいだけの話であって、そういったものに縛られる、要は「子どもの成長に資するかどうか」というこの一点につきると思っています。この共通の価値観の基でいろんな対策を考えていくべきじゃないかと思っています。

個別具体的な話ではありませんけれども、このコロナの時代で経済活動をしている私からすると、例えば、「双方向性」という言葉であったり、あるいは「個別化」という言葉であったり、「流動化」であったり、「流動化」というのは、今までいろいろカテゴライズ化していたすべてのものについて、壁が取り払われる時代がくるのではないかというふうに思います。

最後に、この会議の在り方についてなんですけれども、私は47になります。教育委員に就任したときは40歳。平均年齢が50、60という世界で、いろんな経験、勉強をさせていただきましたけれども、相変わらず、このメンバーの中で私が一番若いというのは、これはゆゆしき問題だと思っています。もう私自身も知らず知らずのうちに、過去の価値観であるとか常識にとらわれています。最近、若者と話をしていると、本当に年をとったなど。若いってすばらしいなど。未来がある彼ら自身がこういうところに出てきて、今までにない意見を言って、それこそ、Tシャツ、短パンで登場するような若い子がここで何か意見を述べるようなことがあってもいいんじゃないかというふうに思います。

要は、これは「総合教育会議」をやるだけの会議じゃなくて、「徳島を担う未来の

子どもたちにとって、「どういう教育をしなければいけないか」を考えなければいけない場なんですから、そういうところに20代、30代の子がいて、今、周りに列席している20代、30代の子たちの意見を聴いてみたいというのが正直なところですよ。

相変わらず生意気なことばかり言いますが、逆に徳島の教育については、自分でこういうふうには言っている以上は、その個別具体的なところでできることはすべてしたいというふうに思っていますので、今後も引き続きよろしくお願ひします。ありがとうございます。

<飯泉知事>

どうもありがとうございました。それでは、田村先生、お願ひいたします。

<四国大学生生活科学部 田村教授>

四国大学生生活科学部児童学科の田村でございます。元教育委員をしておりました。よろしくお願ひいたします。

坂口さんのような大きなお話はできないですが、以前から、ICTとかAIの時代が来るということは予測していたことで、今回のコロナでそれが加速されたというふうに思うところです。

で、今もそうですけど、情報なんてものはすぐ世界からの発信で得られますし、それがすごくスピード化しています。ちょっと考えると、個人でそれが受けられたり発信できるということは、もう「組織から組織」というような考え方ではなくて、「個人から個人」への流れになっていくというふうに思っていて、じゃあ「個人」に注目してものごとを考えたり、進めたりしていかないといけない時代が来たなと思います。

だから、教育もその先を見て、どういうふうな人材育成を進めていけば、徳島教育大綱の人財づくりができるかを考えないといけないなというふうに思いました。

私も、恥ずかしながらですけどアナログ人間です。学生に教えているのも体育の世界なので、ほぼ対面で、身体接触しながら人間関係づくりを教えているようなところの学問なんですけれども、今回のコロナで、非常に「どうしよう」というふうに思いました。

でも授業では、情報技術の得意な先生に教えていただきながら、リモートのズーム（Zoom）の授業をしたり、動画を撮影して、それを学生に配信したり、また、学生からも撮影した動画を受け取ったりしながら進めてきました。「やればできるんだ」というふうに思ったところもあります。けれども、これが今、対面の授業になりまして、せっかく学んだ技術がいまは全然使えていないのが残念。で、リモートで授業をするときに、「本当に体育でできるかな、身体表現ができるかな」と思っていたんですけど、できるんですね、ある意味。おどろいたのは、普通の授業以上に非常にメリットがあったことで、その部分は、本当に対面授業になってからも、

やっていかないといけないというところでした。

ただ、大学のネット環境が十分でないので、それがなかなかできないところもありますが、そういうふうに通常教育の中にもリモートの要素を普段から組み込んでいくことが大切。今、子どもというのは非常に多様化しています。大学生もそうなんですけど、リモートで授業をするに当たって、リモートでは授業が受けられるんだけど、対面になると授業に出てこれないというような学生がいます。そういう場合、知識を理解するようなものを指導する場合というのは、リモートで個人的に学習していく方が教育効果が高いんじゃないかなというふうに思いました。

だから、リモートのような授業と対面的な授業というのを、これからは組み合わせながらいくべきだろうなど。ただ、「人間関係づくり」というのは、絶対そういうICTを通してはなかなかできないと思うので、そこら辺は大事にしたい。以前もグループワークだとか、アクティブ・ラーニング、ずっとその議論を長いことしてきました。それが遠隔リモート授業になってなかなかできないと。でも、これって本当に人間力づくりの中で重要視される場所なので、もし第2波、第3波が来たときに、どのように学生たちに教育していくのか、というところを考えていかないと、「人間関係づくり」が苦手で、外に出られない引きこもりの子どもを増やしてしまうのではないかと、というふうにもちょっと思っています。

ICTを十分活用するためには、1人1台の端末も必要ですし、ネット環境の充実も必要ですから、それは一つのベースとなるんでしょう。また、それを使いながら、もう一つ大事にしていけない対面的な教育で人間関係を大切にしながら、何かを学んでいく、関係を学んでいくということを絶対忘れてはいけません。その両立をどういうふうにしていけばいいのかというのがこれからの課題になるのではないかなと思います。以上です。

<飯泉知事>

どうもありがとうございました。それでは、西社長さん、お願いいたします。

<西精工株式会社 西代表取締役社長>

西精工株式会社の西です。以前、教育委員になっていた関係で今日ここに呼ばれております。よろしく申し上げます。

ちょうど私には中3と高3の子どもがいます。今日、かみさんから「全く関わりが薄いね。あまり子どもに関わらないね」と言われたんですけど、父親の立場として、どうかなといろいろと考えながら教育もやっていますし、一方、会社では中小企業の社長という役割を担っています。

最近よく思うのは、こういう状況においても、「勉強する子ってきつとしているんだろうな」と僕は考えています。環境のせいに決してしない、「何々がないから」とか絶対言わずに、自分の目的、目標に向かって、よりまっすぐに、親の協力、学校の協力を得ながら絶対やってるんだと思います。逆に、勉強しない子は、僕は実際、

勉強しない子だったんですけどね。勉強しない子は、やはり言い訳ばかりして、どれだけ学校とか親がいろんな環境を与えてくれても、おそらく机に向かわないと。で、学校教育においては、おそらくそういう子どもをいかに引き上げていくのかというのが、どちらかというところ緊急の課題なんだろうなと僕は考えています。そこで、やはり田村さんと同じような意見なんですよ。学校で学ぶものというのは、机上の学習ではなくて、やっぱり人と人が直接関わることの大切さ、一生懸命先輩を見て、あるいは、一生懸命の友達を見て、「大きな目的、目標はないんだけど、俺も頑張ってみるか」と。ちょっとしんどいときに声をかけてくれた先生、その先生に褒められたいから頑張る、というような動機付け、それがものすごく大切じゃないかなというふうに思います。この感覚が今ないわけですね。いくらズーム（Zoom）で学習できても、やっぱり雰囲気とか、その場の空気感とか、そういうものが、子どもたちを成長させていく一番大切なところじゃないかなというふうに考えます。

いただいた資料1の中で、「心のケア」に対する項目があって、「相談件数153件」とあるんですよ。おそらく10倍伸びると思うんです。本当に。なぜなら、学校で直接先生が授業をしているときには、子どもの顔色を見ますよね。「何々君、最近元気ないでないか」って。そういうコミュニケーションが、普通の学校生活の中では普通に行われているわけですよ。これがないと。SNSで自分が投稿するとか、相談するというのは、その10倍はいろんなことを考えているんじゃないのかなというふうに考えています。

やはりこれからは、もちろんICTを活用するというのも大切ですけども、今後、限られた条件の中で、「密接」、「密集」というものがどれだけ大切かと。実はウチの会社は「3密」が得意なんですよ。「密閉」はないですけどね。やっぱり、人が集まることによって、安心して生産性も上げていけると思うんです。企業においては生産性が大切ですよ。ただ、生産性をウチの会社の場合どこで上げていったかと言ったら、もちろん技能を上げるとか、ICT化するとか、自動化するということが大切なことです。でも、ウチの会社で一番、生産性を上げるために必要だなと思ったのは、やっぱり「コミュニケーションの質」ですね。これは学校教育とほとんど同じだと僕は思っていて、この辺りを今後どうしていくか、というのが教育現場の課題ではないかなというふうに考えます。

<飯泉知事>

どうもありがとうございました。それでは、佐野事務局長さん、お願いいたします。

<四国大学 佐野事務局長>

四国大学の佐野でございます。どうぞよろしくお願いたします。

最初に徳島県総合教育会議が開かれたのが、私が教育長のときでございます、

そのときに心配されていたのは、知事部局と教育委員会で、制度の在り方とか、そういうようなことで上手くいかないんじゃないかというようなこともあったりしましたけれども、今ここに座らせていただきまして、非常に上手く議論をしていて、徳島県の持っている教育の可能性というものが、ここで広がっていくんだなど、感慨もひとしおですけれども。

その中で2点ほど話をしたいんですが、先ほどの事務局の説明の「学びの保障」の中で、「学校でも家庭でも切れ目のない学びの体制が『小・中・高一貫』して実現」ということが書いてありましたけれども、どうぞここに、小・中・高・「大」というのをに入れていただきまして、徳島県の生徒さん、72パーセントも本学にいますので、学びの連続性の中で、GIGAスクールとかそういうものもやっていることを承知しておりますので、それを受け継いだ形で「小・中・高・大一貫」して、徳島の人財を育てていく、そういうような取組をやりたいなと思っています。もちろん課題がいっぱいありまして、我々のいろんなスキルとか、そういうものがあるんですけども、それを関係性を深める中で、大学としても取り組んでいきたいなというふうに思っております。

で、ICTの話をいろいろ皆さんされましたので、私は具体的に、先日、「ICTってすごいな」と思ったことがありますので、それをお話ししたいと思いますが、先日、飯泉知事がウチの大学で地方創生の授業に来られました。で、そのときに、いろんな施策のお話や全国知事会の取組も話していただいたあとで、学生にアンケート、これは電子のアンケートでありまして、画面に瞬時に学生が考えていることが出てくると。で、もう一つは、「感想」と言うと学生は手を挙げないんです。ところが、出てくる出てくる感想がよかった。「私はこうする、私はこうしたい」というのがありまして、これは、我々の教育に対する取組というものが、本当に「手を挙げてモノを言う」ということではなくて、「ICTの中で心の声を聴き出す」、そういう可能性もあるんだというふうに思いまして、そういう観点からも取り組んでいかなければならないと思っております。

最後に、「徳島教育大綱」の中で、これはよく書いてくれたなと思うんですけども、重点項目の中の1番目に「可能性に挑戦する『こころいき』」と。これはいい言葉だと思うんです。私も「こころいき」を持って、徳島の教育を支えながら、支えられながら、いろんな意味で頑張っていきたいと思えます。終わります。

<飯泉知事>

どうもありがとうございました。それでは、寺内会長さん、お願いいたします。

<徳島県商工会議所連合会 寺内会長>

徳島県商工会議所連合会会長の寺内でございます。先日私もオンライン会議で商工会議所女性会の全国会議がございまして、オンラインで初めての出席だったんですけども、戸惑うことなく日本の皆さんと一緒にいろいろとお顔を見ながらご挨拶

撈ができたりとか、お話ができたということでございます。

私たちの時代でありますと、オンラインとか、電話とかいろいろ携帯とかいうと、「あれっ」と思うようなものでございますけれども、皆さんが今おっしゃってましたように、今後は「新しい会議」というものに、このICT、オンラインというものが実施されて、これからはほとんどこういうような時代になるんやなど、このように私も初めて感じたところでございます。

3点ほど気が付いたことをお話しさせていただきますと、先ほどから教育の問題にも出ておりましたけれども、学校教育、単に「勉強せなあかんでよ」というようなことばかりではなくて、先ほど西社長さんもおっしゃってましたけれども、人間関係を通じて健やかな成長を育み、精神的に成長していただきたいと、このようにしていただいた方がいいのではないかなと。教育の場はそれが一番の課題で、精神力をつくっていただくというのが一番いいことではないかなということを感じました。

また、その中でも、オンラインということもこれからの時代でございます。分散登校や空き教室などの利用、オンラインの授業など、可能な限り子どもたちを支えていただいて、そしてまたコミュニケーションを十分とっていただくような環境づくり、これもしていけないといけないのではないかと感じております。

と申し上げますのも、当たり前のことでございますけれども、将来、社会人として、同僚とか取引先とコミュニケーションができる能力の高い人材が企業には一番喜ばれるということでございます。そういうようなところから、企業や社会にとって役立つ人間形成をできるだけ今後課題として教えていただかなければならないのかな、そういう雰囲気を持っていただかなければいけないのではないかなと思っております。

2点目は、製造メーカーというものになりますと、技術高校とか、技術を作業して様々な機具、機械などを使って製造しております。そういう中で、オンラインの授業だけでは、自ずから限界があるような気もいたします。でも、実際に機械を作ってモノができて、「ああじゃな、こうじゃな」というようなことをしていかなければならないというところには、オンラインだけではやっぱり制限されることも出てくるのではないかなという感じもいたします。

3点目には、企業でも新入社員の採用も、面接がなかなかできないというので、オンラインでするところが多いと思っておりますけれども、結局、人と人との会話、細かい表情、雰囲気というものはなかなかやっぱり映らないので、それを企業と皆さんとがどのように一致してやっていったらいいかということがこれからの課題ではないかなと感じます。

でも、これからオンラインは重要な時代になっていくので、子どもの時からそういうような教育を、「心のケア」とかいろんなことができていければいいなど。ただ「点数100点がいいのよ」というのばかりではなくて、「人間関係をうまくしていく」というような教育も一つの勉強かなと感じております。

3点、いろいろ申し上げましたけれども、地域経済発展のために、こういう課題を早急にいろいろと解決して、子どもたちの学びについては、私ども経済界の者も一生懸命に協力して、いい方向となるよう努めて参りたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

<飯泉知事>

どうもありがとうございました。それでは、次に岡本会長さん、お願いいたします。

<徳島県商工会連合会 岡本会長>

徳島県商工会連合会の岡本です。今日はいい勉強をさせていただいています。

商工会連合会というのはそもそも対象が小さな企業ですから、約8千社ありますけど、どちらかというと、人と人が接する機会が多いというのが、商工会連合会でして、その観点から話をしたらいいのかなと勝手に思っています。実は私は坂口さんに大変お世話になって、ずっと少年野球とか大人の野球とか、県内全部の野球と関係してまして、だいたい日曜日には、朝8時にどこかで開会式の挨拶をしているというのが、一年中のパターンなんです。それが全くないです。私の方が変になっています。

で、もっとつらいのが子どもから手紙が来ます。会った子どもがみんな言います。

「何で大会してくれんの」、「何で集まったらいかんの」って。例えば6年生だったら「5年間何のためにやってきたんかな」って、本当にそんな話ばかりです。

保護者は保護者で家に来て、「コロナはわかるけど、何でやったらいかんの」って、真剣な声で言われるんですよ。つらいです、正直。野球はね、外やけんね、最近「何とかしよう」ということでやることになりました。バレーは中なので難しい。そんなことばかりで頭が痛いときがあるんです。

もう一つは、徳島医療福祉専門学校の理事長をやってまして、先生方のいろんな苦労はよくわかるんですが、うちは少しは学校を休みました。でも基本的には「学校やは休んだらいかんわ」と。で、「今日1年生が来たら、次の日休んでもらって、明日2年生に来てもらえ」と。「常に学校は解放しとけ」ということでずっとやってきて、それはそれでちょっと良かったんかなと思っているんですが、3年生が臨床実習なんです。これを受け入れてくれる病院がないというので、今250人ぐらいいるんですが、大変苦労しています。

そもそも、「オンライン教育」、それはいいんですが、さっき田村さんと西さんが言っていたように、そもそも、きつい言い方をして悪いですが、そんなのは学校教育ではないですよ。だったら、家でやればいいですから。「何のために学校という現場があるか」ということをこのときに真剣に考えないといけないのかなと。おっしゃるように人と人が接して、人と人が触れ合う中で学ぶのが「学校」という教育だと思うんですね。共に汗を流して、共に悔し涙と一緒に味わうことが「大事な教育

現場」なんだろうかと、ずっと思っているんです。

こんなときに、先生方、大変苦勞して、よくわかるんですよ。「集まってコロナになったって言われたらいかな」ってよくわかるんですけど、それはそれとして、そうじゃない「本来の学校の在り方」をどうしたら得られるのか。例えば、空気清浄機をいっぱい入れるとか、教室を上手に使うとか、方法はいっぱいあるんですよ。だから、「休む」というのは簡単なんですよ。授業をやめるのは簡単な話なんですよ。でもそうではなくて、「どうやったら、しっかり子どもが集まって、勉強ができるか」ということを考えるんだと思います。

知事が言うように今チャンスなんですけどね。高校生がさっきの資料だと、県内の大学に44パーセントぐらい進学している。それももっと県内に行ってもらおう。高校生の就職が県内が74パーセントですよ。だから、うちも言っているんですけど、うちは実はちょっと増えたんです。「うちの医療専門学校は田舎で人口密度が70（人/km²）割って、酸素がいっぱいあるけん」と、そればかり言っていたら、ちょっと応募者が増えました。まさに知事がおっしゃる「ピンチをチャンスに」、まさにビッグチャンスなので、これを上手く上手にやったらいいなって私は思っています。

<飯泉知事>

どうもありがとうございました。それでは、布川会長さん、お願いいたします。

<徳島県中小企業団体中央会 布川会長>

徳島県中小企業団体中央会会長の布川でございます。

本業は家具の製造メーカーでありまして、非常にアナログな仕事をしているわけです。

最近はNCというコンピューターを搭載した機械を使って加工しており、非常に精度の高い商品ができるのですが、本当に売れるものというのは、機械だけを使って加工したものではなくて、最後の仕上げに人間が手をかけてやったところが見えるものが、よく売れるんですね。そこにやっぱり人間の本質、思いがよく出ているのかなと思います。

今、岡本会長も熱く語っていただいて、私もそのとおりだと思いますが、今、世界を見ますと、やっぱりITの時代で、「居ながらにして世界中につながる」という時代になっていますので、やっぱりそれを無視してはいけないんだろうと思います。そこで私の思うのはやはり「リモートとリアルを両立していく」事だろうと思います。一方だけではこれからの時代、どうしても無理なんだろうなというふうに思います。

今、コロナ禍で、教育現場ではリモート授業をやられている様ですが、コロナ終息後も定期的にリモート授業も続けて頂きたいと思います。日本人の特性かもしれませんが、「災い過ぎてしまうと忘れてしまう」というか、困ったときはすごく頑張

るのですが、困った状況が解決すると忘れてしまい、やめてしまう。そうすると、せっかく今までやっていたリモート授業のノウハウも忘れてしまうのでは無いでしょうか？やっぱり「続ける」「慣れる事」が重要なんだろうと考えます。

特に私なんかはもういい年なので、本当、毎日、コンピュータ、タブレット、こういったものを使わないと忘れてしまうんですね。きっと、毎日使っていると、それが使いこなせるようになるんじゃないかなというふうに考えます。

ということで、コロナ終息後もぜひリモート授業をこれからも推進して行って頂けたらと思います。岡本さんとはちょっと反対意見かもしれませんが、「リモートとリアルをうまく両立して頑張っていく」というのがこれからの時代なんだろうと考えます。以上です。

<飯泉知事>

どうもありがとうございました。それでは、岡田代表幹事さん、お願いいたします。

<一般社団法人徳島経済同友会 岡田代表幹事>

徳島経済同友会代表幹事の岡田でございます。

私からは、まず私ども企業が求める人材ということでございますけれども、教育界では「エドテック (EdTech)」というそうですが、私ども金融界もデジタル化が随分進みまして、最近、新聞紙上でも「フィンテック (FinTech)」という言葉を見ない日がないほどでございます。

「フィンテック (FinTech)」というのは、「ファイナンス (Finance)」と「テクノロジー (Technology)」が合わさった言葉ですけれども、国民の8割以上が何らかのモバイル端末を持ち、また6割以上がスマートフォンを持つ環境下ということで、今後は、このフィンテックによるサービスが想像以上の速さで進展することは間違いないと思っております。

このような中、「徳島教育大綱」の原本を読ませていただきますと、「スティーム (STEAM) 教育の充実」という取組があり、非常に共感をさせていただいたところで

す。「科学 : Science、技術 : Technology、工学 : Engineering、数学 : Mathematics」の「ステム (STEM) 教育」ではなく、ステムを一步進めて、リベラルアーツ (Liberal Arts) 教養、また芸術のアート (Arts) を加えた「スティーム (STEAM) 教育」が重要で、私自身もこのスティーム教育の必要性を銀行でも強調しております。システム思考に五感を通じたクリエイティブな思考を加えて、新しい価値を創造する人材、こういう人材こそDXが進展する時代には必要ですし、今後、我々企業が求める人材像にもつながっていくのではないのでしょうか。

次に、「遠隔授業」について、皆さま方からご意見を伺ったわけですが、今般のコロナ禍では、子どもたちの「リアルな集合の中での学び」が閉ざされ、これは私の

造語ですが、BCPならぬECP、エデュケーション・コンティニューイティ・プラン (Educational Continuity Plan) を即整備、即実践という状況であると認識しております。

従いまして、GIGAスクール構想もそうですが、一人の取りこぼしも出さないようにするために、柔軟かつ迅速な対応が必要であろうかと存じております。

ただし、「ウィズコロナ」、「アフターコロナ」という観点で見れば、リアルな授業をそのままタブレットに展開するという発想ではなく、既に本県、また文科省でも、「遠隔教育システム導入実証研究」が実施されておりますし、例えば、このコロナ禍でますます重要となるSDGsにおきましては、地元の消費者教育の世界への発信も然りです。

また、「大規模公開オンライン講義」のMOOC (ムーク)、逆に小さなオンライン端末、さらにリカレント教育への応用と、有線・無線のハード面の充実とともに、今こそソフト面でも「デジタルならではの強み」を伸展させる好機であろうかと考えるところです。

以上、私自身、専門知識が乏しいデジタル面でいろいろとお話をさせていただきましたが、最後にデジタルとは逆方向ですけれども、一言だけ申し上げますと、社会的共通資本である教育は、やはり先生も生徒も教室に集まって熱を伝えることが基本で、絶対必要であろうかと思えます。

従いまして、美馬理事もおっしゃいましたが、リアルとデジタル、「ハイブリッドな育み」をお願いして、私からの発言とさせていただきます。宜しくお願いいたします。

<飯泉知事>

どうもありがとうございました。それでは最後に、林会長さん、お願いいたします。

<徳島県経営者協会 林会長>

徳島県経営者協会会長の林香与子でございます。よろしくお願いいたします。

当社は中国との貿易、交流等が長くて、とにかくデジタルにおいてはすごく早くから、刺激と影響と悔しさを受けた私でもありますけれども、雑談めいたような話になる面もあるんですが、やはり、このたびのコロナ禍がですね、本当に教育現場の先生たちの大変さ、そして、小学校、中学校、高等学校と、学生さんの大変さ、また親御さんの大変さ、また、企業は企業での大変さ、本当に社員から、あるいは経営者協会の配偶者の方からのお話等をお伺いしておりますと、皆さん大変な闘いをなさってこられたなというふうに思います。

冒頭申し上げましたように、中国という国は国民の数も多いんですけれども、デジタル化は非常に進んでおりまして、今日の新聞にしても、飯泉知事さんのご説明にもありましたが、やっとここで生徒に一台ずつ支給できるようになったというこ

とで、何が何でも遅れを取り戻すべく、進めていっていただきたいと願う次第でございます。

で、私的には、いただいた資料を基に、キャリア教育と就職に関してのご意見と、自分なりに採用に対してのご提案をまとめましたので、発表させていただきたいと思っております。

キャリア教育について普及を進めている「eラーニング」の仕組みを使って、社会理解、職業理解を深めるための学習を推進してはどうでしょうか。動画視聴やホームページ検索、閲覧による企業や職業、求人の研究。また、企業担当者とWebでの対談、企業や仕事の紹介、仕事の質疑応答などがございます。教育現場においては、コロナの影響でインターンシップや職業体験、講演などが減少し、これらへの代替手段としても活用できますし、企業側としては、企業や仕事に興味を持ってもらい、採用につながるメリットというものがあるのではないのでしょうか。また、学生にとっても、職業選択の機会が増えることにもなり、地元企業に興味を持つことが県内就職率の向上につながるのではないかと思います。

そして、採用に関してのご提案ですけれども、子どもたちが仕事を知るための雑誌「徳島おしごと本」が各教育現場で配布、活用されていると思っておりますが、これらのWeb版を作り配信してはいかがでしょうか。県内の子どもには、キャリア教育のツールの一つとして活用できるとともに、県内外に向けて徳島の仕事情報を発信することで、県内に就職、Uターン、Iターンにつながることを期待したいと思います。サイトの構成は、年齢、またターゲットをどこにするかは検討する必要があると思っております。また、既にある「わかもの若者応援サイト『AWAIRO（あわいろ）』」や、農林水産業応援サイトなどともリンクして、徳島の仕事に関する総合ポータルサイトを作り、徳島県が主導して積極的な情報発信をお願いしたいというふうにご提案を申し上げて、私の意見とさせていただきたいと思っております。

<飯泉知事>

どうもありがとうございました。ただ今は、教育団体の代表の皆様方、また元教育委員の皆様方、そして経済団体代表の皆様方から大変貴重なご提言をいただきました。リアルでの対応という教育。またネット教育、こうしたもの、また世界の最先端を考えると、これからまだまだ日本は、しかしコロナというピンチをいかにチャンスに切り替えるのか、こうしたお話をいただいたところであります。

また、発言時間の3分を大変気にしていただいた方も多くおられたわけですが、実はこのあと4時半から、西村コロナ担当大臣と全国知事会長として意見交換、ちょうど明日からステップ3に入ることが予定されておりましたので、少しご無理を申し上げたところでありますが、実は、先ほどであります、東京都で過去最高の224名の陽性患者を出してしましまして、さあこれ政府としてどうしていくのか、西村大臣がこれに追われることとなり、これが中止となったところでもありますので、途中からは十分皆様方のお話を聞かせていただいたところであり

ます。

(3) 意見交換

<飯泉知事>

それでは、ただ今、有識者の皆様方からいただきました点について、現教育委員の皆様方との意見交換も始めたいと思います。一通り教育委員の皆様方からお聴きをした後に、各有識者の皆様方で「これはちょっと言っておきたい」という点がありましたらぜひ挙手を。ただ、少し時間を押ささせていただくかもしれませんが、その点ご容赦をいただければと思います。もしご予約ある方におかれましては、ご中座をいただければと思います。

それでは、菊池委員さん、お願いいたします。

<菊池委員>

教育委員を拝命しております菊池でございます。よろしくお願いいたします。

教育委員になりまして2年が経過したわけでございますが、月に2回、3回の教育委員会会議に参加させていただきまして、こちらの会議に参加させていただいて、改めて、お伺いする話で、非常に勉強になるというふうに思っております。

先程来、お話があった中で、「教育委員のくせ」というような感じで思われるかもしれませんがけれども、現場のことをちょっとお聴きしたいなということで、青山会長さんの方にお話を持ちかけたところ、コロナ禍の中で、3か月に及んで、おうちでの勉強であったり、お食事であったり、ご家族や子どもさんが、非常に、ストレスを抱えているんじゃないかということのお話をさせてもらった中で、実は、学校が再開してから、不登校の生徒さんが徐々に徐々に増えてきているというお話がありました。

これは、高等学校だけなのか、中学校もそうなのか、小学校も出ているものなのかどうか、そこら辺まではわからないですけれども、実際、5月の連休を境にして、不登校が始まるというようなケースがあるというお話は今お聞きしたんですけれども、既にもう3か月に及んだ長い期間の休業の中で、何か生活リズムが狂ってしまっているのか、こういった生徒さん方を、救うという言い方は良くないんだろうと思うんですけど、双方向のWeb会議であったり、インターネット、ズーム（Zoom）であったり、何かの糸口で救出する、救い上げていくというか、元の位置に戻っていただくような手立てを何とか考えていきたいなというふうに思ったところでございます。実際、顔をつきあわせて、お話ししながら授業を再開するという方向というのが、私もすごく重要なものだなと考えておまして、これがズーム（Zoom）であったり、Web会議のときに「間が持たない」というようなことも、私自身がズーム（Zoom）で会議に参加したときに、そういったふうに考えたものですから、ただ、坂口さんがおっしゃったように、私ももう子育て世代を卒業しちゃっているものですから、改めて、若い世代がこれをどういうふうに活用

していくかというお話をもっと真剣にしなければならないのかなというふうにも思ったりもします。

まだまだ、教育委員会議の中で、このコロナ禍だけでなく、いろんな教育現場の皆さんが働かれている現場の働き方改革の延長線上にあるような、いろんな教職員の方々のフォローを、教育委員会の中でいろいろとサポートしていければと思っております。

<飯泉知事>

どうもありがとうございます。それでは次に、小林委員さん、お願いいたします。

<小林委員>

教育委員を拝命しております小林でございます。よろしくお願いたします。実は私は教育委員会の中で、今回のコロナ対応について一番反対をしていた人間なんです。「どうして一斉休業をしなければならないのか」ということを何回か教育委員会で述べたことがあります。インフルエンザと同じように、学級閉鎖であり、学年閉鎖であり、学校閉鎖でいいのではないかということです。しかし周りの皆様から「薬がないからなんやで、小林さん」のようなご意見を頂いて、「ああ、そうなんですね」と世間の方向性がだいぶ分かってきたんです。

先ほど岡本さんもおっしゃいましたが、このコロナのお陰で学校の部活動を含めてすべてのスポーツが中止になりました。いろんな大会が幼稚園から高校、大学、社会人まで全部中止になりました。私はちょっとラグビーに関わっているのですが、同じようにすべてなくなったわけです。そうしたら今まで経験したことのないような暇ができて、普段考えなかったようなことまで考えたんですよ。

先ほど坂口さんが「コロナで何も変わっていない」とおっしゃっていましたが、私はこの暇な時間にスポーツについていろいろ考えることができ「このままでいいのか」「今が変えるチャンスではないだろうか」ということになったんです。

例えば甲子園でお酒を売っていること。そんなんいいのか。売り子さんがビールを売り歩いているんですよ。私に関係しているラグビーでも花園の売店ではお酒を売っています。

高校生の部活動を見ながら酒を飲むって、「それってダメやろう」という話を何人かにはしました。高校生を見せものにしてはいけません。

徳島教育大綱に「プレイヤーズファースト」という言葉が入っています。どんなスポーツでも「プレイヤーズファースト」であるべきですが、現実にはそうでないことがいっぱいあるんですよ。例えば監督やコーチの指導の仕方。強圧的でパワハラで、体罰も昔はちょっとあったりして。でもそれを当たり前のように受け止める子供たちや親御さんがいらっしゃる。強いチームの監督は強いというだけで赦されて来たんですよ。

また、先ほどちょっと触れた甲子園もそうですが、中学生の全国大会、「全中」やインターハイの開催時期の問題。「8月の猛暑の時期に1ヶ所、あるいは持ち回りの1地域でやる意味があるのか」ということ。甲子園でなければならないのか。「ドーム球場でもいいではないか」全中やインターハイも「北海道、信州の固定でもいいではないか」という意見がなぜ出てこないのか。または封殺されるのか。疑問は次々に生まれます。

そこで飯泉知事をお願いします。全国知事会の会長でいらっしゃいますし、徳島県スポーツ協会の会長でもいらっしゃいますので、まず、「全中、インターハイの時期をずらす」提案を全国知事会で発言して頂きたいのです。「ちょっとみんなで考えませんか」と。知事の発言が、コロナをきっかけにスポーツ界を変えるきっかけになります。

そういうことをひっくるめて「プレイヤーズファースト」でいろんなことを変えて行かなければなりません。是非、飯泉知事のお力をお借りしたいと思います。

私からは以上です。よろしくお願いいたします。

<飯泉知事>

どうもありがとうございました。確かに夏の甲子園も、とてもじゃないですが、あの暑さの中ではなかなかできないという話もあるところでもあります。

それでは次に、藤本委員さん、お願いいたします。

<藤本委員>

教育委員を拝命しております、藤本宗子と申します。よろしくお願いいたします。

今回の新型コロナウイルス感染拡大で臨時休業が長期化いたしました。こういうことは本当に今までなかった未曾有のこととございまして、ただ今、徳島県高等学校長協会からは青山会長さん、徳島県中学校長会からは湯藤会長さん、徳島県小学校長会からは伊丹副会長さん、徳島県国公立幼稚園・こども園長会からは大石会長さんからご発言いただきましたように、また、大学のお話もありましたけれども、もう本当に現場では大変な思いをしていただいたわけとございます。

で、教育委員会の方も、私どもの方へメールで13回にわたりまして、「こういうふうに文科省が言っているので、県としてはこうしていきたい。こうしていきます。こういう文書を出しました」というのを、6月5日には23時11分にメールが参りました。

日本は水がきれいで、医療関係も充実しており、そもそも日本人は、皆さま真面目でいらっしゃいますので、感染者が急増している外国と比べると「日本のミラクル」と言われているように、現場は本当に大変な中、しっかりと第1派にご対応いただいている状況とございます。このことは、知事さんからもお話もありましたけれども。そんな中で、小中学校の学習用端末を1人1台配備していただける、「GIGAスクール構想」の加速という文科省からの知らせがありましたけれども、徳島

県は、それを受けてすぐ、高校生にも1人1台端末を配備することを決定していただいたわけで、本当に早い対応で素晴らしいと思っております。

それにプラスしてなんですけれども、企業には、パソコン購入とか、いろいろなことに対して新型コロナウイルス対策のための支援があると聞いております。ただ今、湯藤会長さんからもお話があったと思いますが、家庭のインターネット環境がなかなか整っていないという状況でございますので、是非この際、全国知事会長である知事さんのお力添えをいただいて、お子さんの家庭のインターネット環境の整備をはじめ、公民館や学童保育にも設備を広げていくためのご支援をお願いしたいと思います。また今、九州や岐阜・長野が、豪雨で非常に大変な被害を受けておりますが、家庭や施設のICT設備を整えていれば、今後、こうした災害発生時においても、大いに役立つと思います。ただ、「設備は整えたけど、使い方がわからない」というのでは役に立ちませんので、先生方は子どもたちに教えていただき、子どもたちは家庭で保護者に教えてあげるとか、そうした交流を通し、みんなが使えるようになる必要があります。そのために、本日お集まりの教育関係者、企業の皆様方、小中高の保護者など、私たち県民全員が一丸となって、日本・世界全体で、この困難な時代を乗り越えていくために「新しい生活様式」をしっかりと打ち立てていかなければなりません。第2波、第3波があると言われておりますし、また違うウイルスの感染症が出る可能性があると言われておりますので、是非、ICT教育のますますの先進県になって、日本、世界のお手本になる徳島県になっていただければと思います。よろしく願いいたします。

<飯泉知事>

どうもありがとうございました。今、藤本委員さんからお話がありましたが、Wi-Fi環境をつくる、あるいは、いよいよ今年度からスタートを切る5G、これは大都市のみを総務省は先にやろうということだったわけではありますが、今では徳島からの提言を受けて、「ローカル5G」ということで、地方でこそ、5Gによって遠隔医療、そして教育、スマート農林水産業と、また、アイ・コンストラクション(i-construction)、さらには様々なモノを作ると、こうした点に活用できるであろうということで提言をさせていただき、それがいよいよ昨年12月24日から免許申請、徳島県が都道府県で最初にこれを頂くことができました。今、県庁と中央テクノスクールの方に入れさせていただき、さらには工技センター、こちらの方でも県内の企業の皆様方に5G環境、ローカル5Gであります。これを体感していただき、いかにこれを製造に結びつけていくのか、システム開発につなげていくのか、こうした形を進めております。

そこで、今お話がありましたように、全国でも似たような環境をつくってほしい。徳島の場合には、日本でもトップクラスの光ファイバーの整備率、またケーブルテレビの普及率となっているところであります。もちろん100パーセントではないわけではあります。そうした意味で、全国に対して、光ファイバーを引いて

いこうと、総務省の新たな予算もできあがったところでもありますので、徳島としても、教育においても、あるいは今申し上げた、あらゆるスマート化において、全国モデルを創り上げていくことができればと。

しかし、これで世界最先端にはなれないんですね。もう一つ、総務省の諮問機関「ビヨンド (Beyond) 5 G 推進戦略懇談会」。5 G をいよいよやろうとするときに、もう 5 G の先を行こうと。それはなぜか。先ほど林会長さんからも出ました中国、あるいはフィンランド、ドイツ、こうしたところは既に 6 G に向けて、今や「ビヨンド 5 G」は当たり前になってきているところでありまして、何とにもこれに追いつかなければならない。しかも我々のターゲットとして、最初に総務省が考えたのは「2030年までに6Gに行こう」ということですので、私の方からは、第1回の会議のときに、「それでは遅い」と。日本の得意な分野だけでいいので、絶好の世界チャレンジの場が来る「2025年大阪関西万博」、ここでこそ、「ビヨンド (Beyond) 5 G レディ (ready)」ということで、それを実装として示そうではないか。何もフルセット標準化をする必要はないということで、今ではそういう方向で、日本も何とにも世界最先端にもう一度返り咲くべく行っているところでもありますので、こうしたことも前提として、榊教育長さんには、最後にまとめとしてお話をいただきますので、各委員さん方も3分をお守りをいただいた方々もおられますので、どうぞ、ここからまたご意見、時間の限り、まだ時間もございますので、挙手をいただければと思います。いかがでしょうか。

失礼しました。その前に辻委員さん、おられました。すみませんでした。

<辻委員>

教育委員を拝命しております辻でございます。ちょうど、西さんがやめられるのと交代で入ったようなかたちで、子どもがいるという前提で入ったわけですが、本当に似合わない、普段は全部女房に丸投げでしたので、非常に教育委員会は遠い存在で、入って困るわけですけれども、何とか4年間務められそうでございます。

お話が知事からもありましたが、社会経済活動を活発にしていくということは、重症化を防ぎつつ病床を確保して、軽傷者が出るのを許していく。まさにこのことだと思ふんですね。軽傷者が増えていくと責任論がすぐ出てくるわけですが、それではなくて「リスクコミュニケーション」、「科学的にどれぐらいのリスクがあるのか」ということをもっともっと話をしていかなければいけないのではないかというふうに思います。そして、「コロナ差別をしない」という心の育成が大事なことだろうと。この二つを早く教育現場でも取り入れていっていただきたいなというふうに思います。この「リスクコミュニケーション」は、日本人はわりかし苦手だと思うので、是非ともできるだけ若い内から、そういう考えを教えていっていただきたらと思います。で、飛行機の機内の空気は3分間で入れ替わるそうです。そうしますと、例えばですが、体育館の空気が3分間で一回入れ替えられると、いろんなスポ

一つもできるんじゃないかというふうに思いますし、空気の動き方に関してはスーパーコンピューターが良さそうだという話も聞いたことがあります。是非ともそういう研究も続けていただいて、最適解を見つけ出していただいたらなというふうに思います。

もう一つが、コロナが発生したからなんですけど、飲食店、レストラン、居酒屋、チェーン店、高級レストラン、いろんな食べ物を食べる場所がありますし、求めれば、シェフに家まで来てもらって作ってもらうというようなこともできるような時代です。昔はよくありましたけれども、例えば、とても大きなおうちだと料理人が家にいるとかですね、そういうことを今でもやっていらっしゃる国とか人もいらっしゃるでしょうから、できれば、教育界でもそういった、「チェーン店ならチェーン店なりの良さ」があるし、それから、「とんがった」というか、とても専門的なことを勉強したいという、そういう人もいればいいし、要は、先ほどのお話にもありましたが、「職人になりたい」というのも、是非とも選択肢の一つに入れてほしいなど。たぶん価値観がすごく変わるのと、世の中がもっと貧富の差が大きくなりそうな気がしますので、それに対応できる人財を育てるという意味で、そういう「スペシャリスト」も教育の中に入れていただきたいなというふうに思います。

で、この二つは、子どもたちに対する大人が提供できることではないかと、そういうふうに思いますので、よろしく願いいたします。

<飯泉知事>

辻さん、大変失礼いたしました。ありがとうございました。

それでは、どなたか、ぜひ。じゃあ小林委員さん。

<小林委員>

先ほど佐野さんのお話の中で、授業中は自分からはまったく手を挙げない、発言もしようとしないのだが、画面上ではいろんな意見がたくさん出てくるということをお聞きしましたが、これって今の大学生の気質というものでしょうか。何か非常に気持ち悪いんですよね。彼らに失礼かもしれませんが。自分の意見を画面上でしか言えない学生が増えて、そういう彼らがこの国を担うようになるんですよね。彼らにこの国を任せていいのでしょうか。このままの日本でいいのでしょうか。皆さんのご意見を伺いたいと思います。

<飯泉知事>

では、佐野事務局長さん、よろしいでしょうか。

<四国大学 佐野事務局長>

小林委員さんの質問ですけれども、教育の多様性という価値観の変化ということ

で、それは許容されるのではないかと思います。意思の表明の手段が違うだけで、意思がないわけではないので、そのところをどう考えるかだと思うんですね。

だから、こういうふうに手を挙げて皆さんの前でしゃべるのが得意な人と、そうでもない人と、その表現の方法が違うだけで、それはやはり一つの価値観として認めていくのが教育のダイバーシティではないかと思います。無論、私も昔人間なので元気な方がいいし、「はいはい」というのがいいんですけども、時代が変遷して、ツールの中のものが変わって行って、社会も変容していると。我々が昔言われたことに、多分先輩方から「何だあれは」と言われたのかもしれないので、人間のそういうものの繰り返しかもしれません。答えになっていなくてすみません。

<飯泉知事>

ありがとうございます。今の点については時代の変遷だと思うんですね。私も平成2年から4年間、山梨大学で教鞭を執っておりましたが、このときはやっぱり、皆さん方、割と私語というのがよくあって、先生方が注意をする「私語をやめなさい」と。しかし、IT機器がだんだん発達をするにしたがって、今度は今は私語がないんですね。教室が静かになったと。でも授業を聞いているかというのと、そうではなくて、ネットでもって隣の人と話をしているんですね。何も意見がないかというのと、先ほど四国大学の現場のお話がありましたように、ネット上で非常に雄弁に語られるということがありまして、逆に言うと、かつて「わー」とリアルにしゃべる子よりは、よりデータをとりながら、正確な緻密な会話が実はネット上でされていると。これが今の現状ではないのかなと。この機器、あるいはネットワークをずっと整備、仕事をやってきた者としては、その変遷をずっと見てきたところでもありますので、その時代、時代、それに応じて、あくまでもICTもこれはツールに過ぎないわけでありまして。それでも、それぞれの皆さん方が自分が考えている点、これを能弁に語っていただける、あるいは情報をタイムリーにとることができる、こうした点がより有効になるのではないかと。それによって密状態も解消されて、結果として、今回の「新しい生活様式」がその最先端が大学の状況ということになるのではないかと思います。ということで、予定していた時間ちょうどとなりましたので、ここで、**榊**教育長さんに最後のまとめをお願いしたいと思います。

<榊教育長>

この4月に、教育委員会、教育長を拝命いたしました**榊**でございます。

教育関係者の皆さん、それから歴代の教育委員の皆さん、それから企業の関係者の皆さん、いろいろ多方面から意見をいただきまして、ありがとうございました。いろいろな意見につきまして、メモを少しずつとっていたんですけど、知事の方からまとめというような話もありましたが、なかなか多くのご提言をいただきまして、まとめあげることが、実際、今のところできない状況でございます。

この4月1日に教育長になりまして、一番最初、休校の状態からスタートをいたしました。その中から、3か月が少し経って、学校に子どもたちの声が帰ってきて、

朝、通勤をしているときにも、子どもたちが通学している姿を見て、「やっと日常が帰ってきたな」と実感をしています。同時に、「日常生活を維持していく」ということが、すごく重要で難しいことなんだなということも改めて感じているところです。

また、「学校って何だろう。学校というのは何が必要なんだろう」ということを、様々なご意見をお伺いしながら、「学びの保障」という題だったんですけど、改めて考えさせられたような気がします。

その中で、この3か月行ってきたことについては、先ほど教育次長の方からご説明をさせていただいたんですけど、やっぱり危機の状況では、一番シンプルに考えていくことが大事なんじゃないかなと思ってやってきました。

学校の中でやっぱり大事なことというのは、子どもたちに「確かな学び」、それから「豊かな心」、それから「健やかな体」というのをいかにして提供していくか。「未知の世界に果敢に挑戦する夢と志あふれる「人財」の育成」という基本方針はあるんですけど、その基盤となるものをこういう危機のときには、どうやってじっくり子どもたちに提供していけばいいのかというのが大事なんじゃないかなと思って、いろいろ工夫をしてきたところです。

今までお話しをいただいた「オンライン教育、対面学習」につきましても、まず、集団での学習から、「じっくり見る学習の重要性」というのが浮き上がってきたと同時に、「単純学習の重要性」というのも、もう一度考えさせられるような期間だったのではないかなと思っています。

委員の方からもお話があったように、やっぱり「バランスが大事」であると。オンライン教育ももちろん大事。対面的な学習も大事であると。国を見ますと、他国よりは日本のオンライン教育というのは少し遅れているというような気がします。今、このピンチをチャンスに、知事の方からも、小・中・高一貫したGIGAスクールを支えていただける体制をとっていただきましたので、これをチャンスにして、しっかりオンライン教育は充実していくと同時に、対面的な学習、今まで学校が積み上げてきた「教育の財産」というのも大事に活用しながら、両面で進めていくということが大事なんじゃないかなと思っています。

それから、「小・中・高の連携」というお話で、「大学もあるぞ」というようなこともお話しいただきました。「小・中・高・大の連携」というのは、徳島では大事だと思っています。特に「高大の接続」につきましても、国の方も秋季入学等の議論もいただいたところですが、やっぱり高校を卒業して、大学に進んでいく方、それから企業の方に就職される方、様々な進路があるんですけども、そういう「接続の在り方」というのは、この機会に、もう一度しっかり考えていく必要があるというふうに考えております。

また、2点目、「心を育てていく」ということなんですけど、「精神力」という言葉もいただきました。「リスクコミュニケーション」とか、「差別」、「いじめ」のこともあります。不登校の子どもさんも同時に授業に参加できるオンラインの仕組みというのも、改めて見せていただくということもできたと思っています。

基本的にはやっぱり心を育てていくためには、「創造力」というのが大事だと思っています。相手のことを思う心、そして自分の心もしっかり他の人にわかっていただくようなコミュニケーションの仕方というの、時代に応じて変わっていくと。

ただ、シンプルに考えますと、私は特別支援学校の人間ですので、子どもたちには常々、「自分がされて嫌なことは他人にしたらあかんよ」と、そういうようなこと。

「じゃあ、相手がされて嫌なこと、自分がされて嫌なことは何かな」というような、相手のことをおもんばかったり、創造する力というのは、学校教育の中でしっかり教えていく必要があるというふうに思っています。

3点目の「健やかな体」につきましては、やっぱりどうしても身体接触、飛沫感染等がありますので、スポーツの分野、特に接触があるスポーツについては、このたびのことでは、かなりご迷惑をおかけしたと思っています。やっぱり、新型コロナ時代のスポーツの活動とか、スポーツの指導の在り方というのも考えていかなければならない。学校を再開した後、「子どもたちの体力が落ちた」というふうなことも言われておりますので、子どもたちの体力もしっかり取り返していくようなやり方というのも考えていく必要があると思っております。

「学び」と「心」と「体」をしっかり支えていくということが、学校の仕事であり、それをしっかりサポートしていくのが教育委員会の仕事であるというふうに思っていますが、なかなか未知のウイルスは手強いので、一步一步、手探り状態というのが実際続いているところです。

これからも、いろんな方々にご協力もいただきまして、ご指導、ご助言もいただき、最後は、子どもたちがしっかり学校の中で活動できる、学校を卒業して、社会に出て活動できる、そういう子どもたちを育成したいというふうに思っておりますので、これからもどうぞご協力の程よろしくお願いしたいと思います。簡単ですが以上です。よろしくお願いいたします。

<飯泉知事>

今日は皆様方には積極的にご提言を賜りまして、誠にありがとうございます。

今回の新型コロナウイルス、おそらくペスト以来ということで、14世紀にペストの後にはルネッサンスが起きたと。まさに今回、「大ピンチを大チャンスに」ということで、新しい教育をはじめとする、あらゆる分野での価値観、あるいは体制、こうしたものが創れるように、皆様方と共々力を合わせて進めていきたいと、このように考えておりますので、これからも大所高所からご示唆賜りますようどうぞよろしくお願いを申し上げます。

以上をもちまして、第1回総合教育会議を終了とさせていただきます。本日はどうもありがとうございます。

以上